

## 日本経済をどうとらえるのか

岩波新書に「日本経済図説」という本があります。日本の経済について、データに基づいてコンパクトに解説したもので、法学部や経済学部など社会科学の分野に将来進みたいと考えている生徒には、ぜひ手に取ってもらいたい本です。地歴・公民科の受験勉強は、教科書に出てくる基礎的な用語を覚えたり、ある事象についての流れを理解することから始まりますが、その先には身に着けた言葉を使って、与えられたテーマについて説明したり、課題を整理したりする力が必要になります。その力が具体的に表された例として、この本を読むことができます。

日本経済図説は2013年に初版が出たのち、何度か改版されて、第5版が昨年出版されました。その「あとがき」には、次のように書かれています。

日本経済は1990年代入って以降、とりわけ2000年代以降、人びとが認識する以上に多くの分野で国際的な立ち位置を後退させてきた。特に先端産業分野における競争力が後退している。経済成長率の観点からみても、足踏み状態が長期化してきている。それは、この間の世界経済の変化、特に経済のグローバル化や情報通信分野での革新にうまく対応できなかったためだろう。(中略) それまでプラスに働いてきたやり方であっても捨てる必要があったが、それができなかったということだろう。それは終身雇用であり、年功序列であり、学歴偏重であり、男女不平等であり、安定志向だった。(中略) 与えられた課題を効率よく解決する能力をなくしたかに見える官僚機構、官僚を適切に指導・誘導できない政治家も変わらなければならなかった。

確かに一人あたりのGDP(国内総生産)の変化をみても、日本がこの20年余り足踏み状態が続いているのに、アメリカをはじめとしたいわゆる先進国や中国、韓国などは、波はあるものの確実に伸びてきています。

私が社会科の教員になった1985年当時、ベストセラーになっていた本の一つに、エズラ・F・ヴォーゲルの「ジャパン・アズ・ナンバーワン」がありました。石油ショック後の低成長時代の中で、アメリカやソ連が莫大な軍事費の負担にあえぎ、西ヨーロッパ諸国が少子高齢化社会を迎えて、外国人労働者の流入等で社会基盤の変革を迫られるなど経済が停滞する中で、日本経済が急速に成長した理由について書かれた本でした。

そこでは終身雇用や年功序列を基本とした組織、従業員を家族のように大切にす大会社の経営者、優秀な官僚機構等々が外国人の目から解説され、「カイゼン」などの用語とともに、日本的経営は広く世界に知れ渡りました。円高が進み、海外旅行をした時には円の価値を私も実感しました。そして、バブル経済。大都市圏の地価が高騰し、企業の平均株価は現在の2倍近くになりました。ジャパンマネーが世界を席卷して、ニューヨークの一等地のビルを日本企業が購入したことがニュースになりました。

会社に勤めた友人たちは、公務員だった私の2倍以上の給料をもらい、せっせと株式投資をして、海外旅行に行ったり外車を買ったりしていました。ある友人からは、「今度うちの会社が東証一部に上場する予定だから、おまえ株を買わないか。絶対もうかるよ。」と誘われたことがありました。しかし、当時横浜の4畳半一間に狭い台所とトイレ(風呂は近くの銭湯

でした)で家賃25,000円のアパートに住み、日曜日(当時学校は土曜日にも午前中授業があり、休みは日曜日だけでした)に部活の練習試合に行くために自家用車を買うのが精いっぱいだった私には、そんな余裕はありませんでした。(だいたいこれはインサイダー取引で違法です。「リクルート・コスモス事件」について調べてみてください。)

バブル景気崩壊後の30年間の日本経済については、さきほどの「あとがき」に書かれたとおりです。その結果というべきか、日本経済図説には続けてこのように書かれています。

経済の先行きに確信を持たない家計も企業も貯蓄超過を続けたことにより、需要不足が続いてきたが、その穴を埋めたのが赤字財政による政府支出だった。その結果として、日本の財政状況は先進国の中でもダントツに悪化した。しかし財政再建への動きは鈍い。金利が上がるような状況がくるまで財政再建はできないかもしれない。

日本銀行はこのところずっとゼロ金利政策、つまり公定歩合を0%にして、お金を借りやすくし、かつ貯めても利子につかないからどんどん使ってくださいという政策をとってきましたが、国民は想像以上に将来に不安を感じているのか、それでもお金を使わずに貯蓄に走る傾向がありました。だからインフレ(物価高)にならないのですね。

なんだか新年早々、暗い話になってしまいました。しかし、みなさんはこの日本の現実から社会人としてのスタートを切ることになるのです。大学で何を学び、そしてどんな仕事についていくのか、さらにはそこでどのように働くのかについて、世界の動向や身近の社会の様子から考えていかなければなりません。

そんな皆さんに考えてもらいたいのは、どんなふうに協働するかということです。一人でコツコツやるのは受験勉強が最後です。ここから先は、自分一人ではできないことを集団で達成するワークスタイルを、皆が意識的に考えることが必要だと私は思います。そんなことを考える糸口の一つとして、日向野幹也さんの「高校生からのリーダーシップ入門」(ちくまプリマー新書)を読むことを勧めます。日向野さんは「権限なきリーダーシップ」という考え方を大学生に指導して有名になりました。リーダーシップというのは、一部の権限のある人がとるものだと考えがちです。しかし、これからの時代に必要なのは、目標を共有し、相互に率先して良いと思う行動をとり、そして周囲を支援することを内に持った集団の中で、一人ひとりが権限なきリーダーシップをとることだと彼は言っています。

GAFという言葉を知っていますか?Google、Amazon、Facebook、Appleという世界的な巨大企業を指す言葉です。こうした企業は、本社機能の中核部に世界的な規模で人材を集めてゆるやかな組織をつくり、デジタルの力を大きく借りながら働き方改革を進めつつ、1年365日休むことなく事業を動かし、莫大な利益を上げています。極端な例かもしれませんが、かつて日本的経営を世界の企業が学んだように、日本はこのような企業から学ぶことが必要なのではないでしょうか。